研　究　紀　要

外 国 語 部 会

［講 演］「英語授業における教師の仕事とＡＩにさせる作業の切り分け」
大阪公立大学工業高等専門学校　一般科目系　　講師　谷 野 圭 亮 …… 1
［公開授業］
発表者　　青森県立青森高等学校　教諭　舘 田 剛 志 …… 3
［第１分科会］「実業高校におけるパフォーマンステスト実施の足がけの工夫」
青森県立三沢商業高等学校　教諭　宮 崎 優 里 …… 5
［第２分科会］「新時代に対応した英語教育　～未来を切り拓く英語力の育成～」
青森県立八戸工業高等学校　教諭　島 村　　泉 …… 7
部 会 の 動 き　…… １０
研 究 テ ー マ　…… １１

紀要編集委員　中野渡　　静　（青森県立三本木高等学校）

外　国　語　部　会
【全　体　講　演】

英語授業における教師の仕事とＡＩにさせる作業の切り分け

講　師　大阪公立大学工業高等専門学校　一般科目系　講師　谷　野　圭　亮
記録者　青森県立青森北高等学校　對　馬　信　之

１　はじめに

本講演は、大阪公立大学工業高等専門学校の英語教員である谷野圭亮氏が、「英語教育における教師の仕事とAIにさせる作業の切り分け」を主題に、生成AI（チャットボット型・エージェント型）や自作ツール群の具体的な活用法、プロンプト設計、実践知、そして教育現場での課題を共有したものである。講演では、AIが教材作成（リスニング音声、レベル別リライト、問題生成）、学習支援、評価運用を効率化する一方、整序問題作成や事実の正確性といった弱点も持つことを指摘。特に、AI任せにすると誤りが生じやすい整序問題はJavaScript等のコードで自動化する方が正確かつ低コストであると実演を交え解説した。

また、機械翻訳と生成AIが学習者の不安に与える影響の比較研究を紹介し、生成AI利用時には「外的評価への不安」が高まるため、使用を許容し「使っても怒られない」評価・指導設計が重要だと示唆した。生徒のAI利用については、丁寧なプロンプトの配布、使用場面の明確化、ログ取得による不正抑止といった具体的な運用法を提示。さらに、教科書本文のみを根拠に問題作成・スライド生成を行い、ハルシネーションを抑制する「Google Gemini Notebook」や、手書きライティングの大量・高頻度評価を約10分で自動化するワークフロー（Inklubic）、中学向けにスマホ撮影で即時文法チェックが可能な「グラマーレンズ」といった自作ツール群を紹介した。

最後に、PC内のファイルを自律的に読み書きし、PowerPoint作成などを自動化する「エージェント型AI」の可能性と、機密情報漏洩のリスクを強調。高額アプリへの依存ではなく、誰もが使える「生のAI」の活用法を教える重要性と、AIの得手不得手を理解し、授業デザインから逆算して活用場面を考える姿勢を訴えた。

２講演の概要

⑴　英語教育におけるAI活用の全体像と基本姿勢

AI活用の現在地と進化の速さ：AIの進化は非常に速く、教材やスライドがすぐに古くなるため、常に最新情報を基に「現在地」を更新する必要がある。

AIと教師のベストミックス：「AIか教師か」の二項対立ではなく、「AIと教師のベストミックス」を探る姿勢を基本とする。AI活用で授業の質は向上するが、教員の仕事量・負荷が軽減されるわけではなく、活用と負荷のバランス設計が課題である。

「生のAI」を教える重要性：文科省事業などで導入される高額アプリは持続可能性が低いため、ChatGPTなど誰もがアクセスできる汎用AI（生のAI）の使い方を教えることが、費用や環境の変化に強い運用につながる。

「効かせる」使い方：AIで「楽をする」だけでなく、授業デザイン全体から逆算して「どこにAIを使い、どこには使わないか」を判断し、学習効果を高める視点が重要である。

講師の所属背景：講師は大阪公立大学工業高等専門学校に所属。大阪府立高専が大阪公立大学に統合される経緯で、組織変更を複数回経験。公立高専の特性として教員の異動が少なく、同僚性が育まれやすいという背景も持つ。

⑵　生成AIの得手不得手と業務の切り分け

AIが得意なこと：

教材作成：リスニング音声の内製化（ElevenLabs等）、学習者レベルに応じた英文のリライト（難易度調

整)、画像・手書き答案のテキスト化（OCR)、多肢選択問題（四択）やTrue/False問題の生成。

学習支援: 要約やフィードバックコメントの叩き台作成、自作英作文の添削と修正理由の説明、より自然な表現の選択肢提示。

AIが苦手なこと・リスク:

整序問題（並べ替え）: 単語が追加・重複するなど精度が極めて低く、AI任せは不適切である。

数値・引用の改変: 原文保持が苦手で、数値や引用符内の内容を勝手に変更するリスクがある。

語数制限の厳密な遵守: 指示された語数を正確に守ることが苦手である。

和文英訳問題: 教師が狙いたい複雑な構文や特定の語彙を意図通りに問題化しにくい。

事実の正確性（ハルシネーション）: 生成された内容の事実確認は必須である。

業務分担の指針: 反復・定型的な作業（音声作成、リライト等）はAIに任せ、正確性が不可欠な教材作成(整序問題）や最終的な成績評価、事実確認は人が担うべき。

(3) プロンプト設計と品質管理

高品質プロンプトの要点: 良い出力を得るには高品質なプロンプトが不可欠（Garbage in, garbage out)。以下の要素を明示すると品質が向上する。

1. 役割指定: 「あなたは英語の教員」など。
2. 対象・目的: 「高校2年生向け」「定期試験で使う」など。
3. 条件: 「約150語で」「箇条書きで」など。
4. 出力形式: 「Wordで出して」など。
5. 付加指示: 「選択肢の正答がばらけるように」「誤答は本文の言い換えで作る」など。

生徒へのプロンプト指導: 生徒の雑なプロンプト（「これ直して」等）では学習効果が低いため、教員が評価基準（英検ルーブリック等）を基に作成した「丁寧なプロンプト」を配布し、それを貼り付けてから使わせることで品質を安定させる。

(4) 具体的なAI活用ツールと実践例

リスニング音声の内製化（ElevenLabs）: かつてはALTへの依頼や機材準備が必要だったが、AI音声合成ツール（ElevenLabs等）で容易に作成可能になる。無料枠でも十分利用でき、話者、アクセント、ピッチ等をSSMLで調整できる。

整序問題の自動化（非AIアプローチ）: AIの弱点を回避するため、JavaScriptやExcel VBAでコード化し、正確かつ低コスト（0円）で整序問題を作成する自作アプリを開発した。反復・定型処理はコード化が堅牢であると実証済みである。

Google Gemini Notebookの活用: 与えられた情報（ソース）の範囲内でのみ応答するため、教科書本文を投入すればハルシネーションを抑制した問題作成やスライド生成が可能。学校アカウントで利用でき、試験成績向上効果も確認済みである。

ライティング評価ツール「Inklubic（インクルービック)」:

ワークフロー: 手書き答案をスキャン→OCRでテキスト化→CSVで一括DL→ルーブリックに基づき一括評価・フィードバックPDF生成。40人クラスで約10分の高速処理を実現した。

高頻度フィードバックの効果: 前期15回中10回のライティング課題で毎回フィードバックを返却した結果、4月〜7月末で生徒の英文の質が顕著に向上した。

人力レビューの介在: AIの過剰な修正提案などを防ぐため、返却前に人間がiPad等でざっと確認・調整する。

中学向け文法チェックツール「グラマーレンズ」: 教科書の小課題で書いた英文をスマホ撮影すると、OCRでテキスト化→文法チェック・修正案・アドバイスを即時提示。模範解答の丸写しを防ぎ、自作文の改善を促す。

教員向け支援アプリ「コピー中でAI」「Teacher Tools」:

コピー中でAI: 配布プロンプトと自作英文を簡単にAI（Gemini/ChatGPT/Claude）へ貼り付けられる簡易アプリである。

Teacher Tools: 語彙リスト作成、英文書き換え、問題作成などの自作ツール群を無料公開している。

(5) AIと学習者心理・評価設計

学習者不安（Anxiety）への影響: 機械翻訳（DeepL）と生成AIは共にライティングへの全体的な不安を低減させるが、生成AIでは「AI使用がバレる/咎められるかもしれない」という外的評価への不安が高まることが

調査で判明した。

教育的示唆: AI 利用を許容するなら、「使っても怒られない」環境を評価設計（使用範囲の明示、申告ルール、プロセス評価等）で担保し、外的評価不安を低減させる必要がある。

評価の厳格化: AI 使用可の課題は完成度を厳格に評価し、「どうせ AI で作るなら完璧を出す」よう指導した。雑な AI 利用は低得点につながることを示す。

不正抑止と努力の可視化: 操作ログを記録するツールで執筆プロセス（書き直しの履歴等）を可視化し、コピペ提出を検出しやすくする。

(6) エージェント型 AI の可能性とリスク

定義と特性: 指示一つで PC 内のファイルを自律的に読み書き・修正し、タスクを完結させる AI（例: Codex, Claude Code, AntiGravity)。チャット型のように都度コピペする必要がない。

活用例（PowerPoint 自動生成）: 講師が口頭で話した旅行計画の音声を基に、構成考案、本文・写真（出典付)・スピーカーノートまで含んだプレゼン資料を約 13 分で自動生成したデモを紹介した。

セキュリティリスクと対策: PC 内の機密情報や個人情報（名簿等）を意図せず読み込み、情報漏洩につながる危険性がある。対策として、①エージェント専用の安価な PC を用意する、②ネットワークに接続しないローカル LLM を活用する、といった方法が有効的である。

(7) 周辺情報

講師の個人的活動: 合法的な免許のもとビール会社に出資し、醸造に関与している。

関連文献: 自身の論考が英語教育誌（2025 年 4 月号等）に掲載。また、関西大学の水本　篤先生や北海道大学の亘理　陽一先生の著書も AI との付き合い方を考える上で参考になると紹介した。

公　開　授　業

授業者　青森県立青森高等学校　　舘田　剛志
助言者　青森県立六ヶ所高等学校　作田　宏之
司会者　青森県立青森高等学校　　堤　　孝
記録者　青森県立青森高等学校　　小林　唯成

１　指導上工夫したポイント

・量の重視･･･量は質に転化する
・英語は実技教科･･･ 「大谷翔平のバッティング理論を学んでも、我々はホームランを打てない」を例に、実際に読んだり書いたりする活動を大切にしている。
・訓練無くして成長無し･･･学んだ知識を訓練で定着させる。
・厳しさという優しさ･･･「厳しさの中に楽しさを見出す」ことが、英語力を伸ばすために大切である。

２　授業での指導内容（ＶＴＲを再生し、授業者がコメントを付け加える形で実施。）

本時のテーマ: リスニング

活動内容: 概要把握

※以下、－ＶＴＲ：　－は動画の概要、・～は授業者のコメントとする。

－ＶＴＲ：　導入（単語確認）と語彙練習（クイックレスポンス）－

・空欄ワークシートに 5 分で既知語を書き込む（使用単語帳: LEAP。Part1・2 は 2 周済み。最近は定着度確認のためヒントなしを配布)。

・音声練習→発音できるか確認。「見てすぐ反応して音を出せる状態」を作る目的。
・クイックレスポンス（英語→追っかけ発音→日本語訳→ペアワーク 30 秒）で瞬発的に意味が浮かぶ状態を目指す。
・30 秒で最大 18 個正答できた生徒がいた。成績上位以外の生徒も活躍できるため、意欲的に参加している。
・授業開始から約 27 分を語彙定着とクイックレスポンスの活動に充てている。

－ＶＴＲ：教科書英文をリスニングし、メモをとる－
・ALT がメモの取り方の特別授業を実施（英語で矢印・記号活用）。当初 ALT は板書をしなかったため、生徒が具体像を掴めなかった。依頼して初見に近いメモを板書してもらう運用に変更した。
・習熟が低い生徒には「クイックレスポンスで学習した単語が聞こえたら書き留める」「とにかく聞くのをやめず食らいつく」姿勢を指導している。
・志望に応じて耳の負荷を可変化。「東大を目指す子はレッスン 1～4 を通して聞きなさい」「週末課題の英文はまずリスニングから」と指示している。

－ＶＴＲ：英文内容を黒板に書いたメモを使いながら、教師が内容を口頭でまとめる－
・英文構造を意識づけるため、「パラグラフには言いたいことは一つ」。「抽象→具体」を意識。例えば「benefit」が聞こえたら「for example」等の例示を予測しながら聞くよう指導している。また「one study」→「another/also」を想定することで、本文中のポイントを拾うことができる。

－ＶＴＲ　終了　－

３　授業者からのコメント
最初に概要を掴ませ、その後詳細読解の課題という流れで授業を行っている。「まるで何もわからないもの」を読んでくるのではなく、「読んでわかってるからこそ深く考える課題」を出している。1 レッスンを５～６時間で扱う。これからも語彙力の増強、音読トレーニング＋リスニングトレーニング、忍耐力・体力の増強を続けていく予定である。

４　質疑応答
島村（八戸工業高校）：予習は禁止か？ 家庭学習で何を課しているか？
舘田：予習は禁じていない。家庭学習は復習中心とし、「今日やったものを家で 30 回読んでくる」と指示している。授業で分かったものの反復の方が効率的と判断し、このように指導している。
島村：復習をしっかりすれば、定期考査でも点数がとれるように設計しているか？
舘田：復習の回数が多い人が得点をとれるテストにするように心がけている

５　講評　青森県立六ヶ所高校校長　作田　宏之
難度の高い英文でのリスニングとメモ取りはハイレベルな活動ではあるが、指示がなくても自発的に活動に入る生徒の姿勢は高く評価できる。舘田先生の教材研究の深さと授業への自信が伝わる授業であった。

（授業への助言）
・リスニング聞き取り回数について
スキーマを活性化させるため、導入で英文に関するスモールトークやペアトークを英語で行うこと、聞き取りのポイントを事前に示す。また、リスニング回数が 1 回のみではリスニングが苦手な生徒に負荷が大きいため、ペアで内容を共有したり、iPad 等を使用して英文を聞き直す活動も取り入れるとよい。
・本時の活動の評価方法について
指導案の評価基準のＡ評価とＢ評価の評価軸が曖昧である。こういったリスニング活動では、「メモが取れている＝概要を把握できている」と判断して良いのかという点に気をつけて評価方法や基準を考える必要がある。
・リスニング後に内容をまとめるという授業展開について
授業目標が概要把握であれば、リスニング後に行うまとめも概要把握を意識したものになると良い。生徒に発問し

ながら、内容をまとめることもできる。

青森高校の生徒は高いレベルの要求に応えられる能力があるため、舘田先生には今後も様々な指導法に挑戦し、自身の指導法を磨き続けてほしい。

【第１分科会】

「実業高校におけるパフォーマンステスト実施の足がけの工夫」

発表者　青森県立三沢商業高等学校　　宮﨑　優里
助言者　青森県立三沢高等学校（定時制）坂岡　優子
司会者　青森県立三沢商業高等学校　　三國　里奈
記録者　青森県立三沢商業高等学校　　中村　愛美

１　学校紹介

三沢商業高等学校は，ハイパーアカウンティングハイスクール（ＨＡＨ）に指定され，簿記教育に力を入れている実業高校である。全校生徒が日商簿記検定を受験し，商業科の教員を中心に学校全体で資格取得を支援している。また，簿記以外の検定取得や部活動にも積極的に取り組む生徒が多い。

教育課程においては，全体の約３分の１を商業科目が占めている。英語科では，１年次に「英語コミュニケーションⅠ」，２・３年次に「英語コミュニケーションⅡ」をそれぞれ週３単位で履修している。「論理表現」は選択科目として設定され，２・３年次に履修することができる。英語の履修単位数は，生徒によって３年間で９～１５単位となる。１・２年次の「英語コミュニケーション」では，数研出版『COMET』を使用し，１単元を概ね１０～１２時間で学習している。

２　これまでの経緯

本校の生徒は，素直で授業に前向きに取り組む生徒が多い一方，英語に対する苦手意識をもつ生徒も少なくない。令和７年度入学生１２０名を対象として実施したアンケートでは，「英語が好き」と回答した生徒は３２人（２６．７％）であったのに対し，「嫌い」は４３人（３５．８％），「どちらでもない」は４５人（３７．５％）であった。「英語が嫌い」と回答した生徒の理由をＡＩテキストマイニングで分析すると，文法の複雑さに対する苦手意識や，「読めない」「話せない」「分からない」といった否定的な感情が多く見られた。

そこで，４技能を総合的に育成するためには，英語に苦手意識や不安を抱える生徒が安心して言語活動に取り組める環境を整える必要があると考えた。本校英語科では，パフォーマンステストを取り入れ，その中で生徒の学習を支えるさまざまな手立てを講じてきた。本実践では，それらを「足がけ」と捉え，実践内容を整理した。

３　実践内容

これまでの実践を整理した結果，「①インプットの足がけ」「②課題設定の足がけ」「③学習負荷を調整する足がけ」「④心理的足がけ」の４つに分類することができた。

（１）インプットの足がけ

教科書本文の学習では，読解や音読を通して，パフォーマンステストで活用する表現を十分にインプットできるようにしている。担当者によって新出語句の予測やリスニングなどを取り入れながら，本文の内容理解から音読，表現活動へと段階的につなげている。

（２）課題設定の足がけ

生徒が自分の経験や興味を生かして話すことができるよう，身近で取り組みやすいテーマを設定している。これまでに「夏休みの絵日記」「修学旅行の思い出」「好きな絵本の紹介」「京都旅行プラン」「得意なことのコツ」「新入生への学校生活のアドバイス」「新年の目標」「課題研究の研究内容」などを扱った。身近なテーマを設定することで，英語力だけではなく，生徒自身の知識や経験を生かして発表内容を考えられるようにしている。

（3）学習負荷を調整する足がけ

原稿作成，資料作成，発表練習の各段階で支援を行っている。原稿作成では，ブレインストーミングによるアイデア出しや例文，ガイドラインを提示し，必要に応じてＡＩも活用している。その際，ＡＩを効果的かつ適切に使用する方法についても指導している。資料作成では，スライド作成が難しい生徒に写真のみでの発表を認めたり，CanvaやSlides goなどのツールを紹介したりするなど，生徒の実態に応じて負荷を調整している。また，発表練習では，教師やＡＬＴによるモデル発表を提示し，生徒が発表の具体的なイメージをもてるようにしている。

（4）心理的足がけ

人前で英語を話すことへの不安や緊張を軽減するため，計画的に練習機会を設定し，段階的に発表の形態を変化させている。まずはグループや教師の前で発表し，徐々に聴衆の人数を増やすことで，人前で話すことに慣れさせている。ペアでの練習も繰り返し行い，自信をもって発表できるようにしている。また，評価ルーブリックでは，まずB評価の達成を目標とし，達成できたことを積極的に認めるようにしている。発表前には発音の個別指導を行うこともある。

具体的な実践として，教科書内容を要約した文章をニュースキャスターのように読む「音読テスト」を行った。原稿を見ながら発表することを認め，背景動画やＢＧＭを用いることで，発表への抵抗感を軽減した。ＡＬＴによるモデル音声を聞いた後，個人練習と個別コーチングを行い，テストに臨む形とした。

また，比較表現を扱った単元では，ＡＬＴが読み上げる宿泊条件を聞き取り，ホテルのリストから適切なホテルを選び，その理由を英語で説明する「やり取り」の活動を行った。比較級・最上級を用いた文を作る練習やペアワークを複数回行った上で，実際の場面を想定したテストを実施した。負荷の高い活動であるため，別室でテストを行うなど，心理的負担にも配慮した。

４　成果

令和７年度入学生に対して入学時と２学年進級時に同一内容のアンケートを実施し，英語に対する意識の変化を比較した。その結果，「英語が好き」と回答した生徒は３２人（２６．７%）から４９人（４１．５%）へ増加した。一方，「英語が嫌い」と回答した生徒は４３人（３５．８%）から２３人（１９．５%）へ減少した。この変化から，さまざまな足がけを講じながらパフォーマンステストを継続したことにより，生徒が英語学習の中で「自分にもできること」を実感し，英語に対する否定的なイメージが改善された可能性が考えられる。

また，１年次末の振り返りシートからは，活動を通して自分の得意・不得意を見つめ直す生徒の姿も見られた。スライド作成や人前での発表を課題として捉え，今後さらに努力したいと考える生徒がいる一方，発音を自分の強みとして認識し，さらに伸ばしたいと考える生徒も見られた。パフォーマンステストが，英語力だけでなく，自身の学びを振り返る機会にもなっていることがうかがえる。

５　今後の課題

第一の課題は，持続可能なパフォーマンステストの運営である。限られた授業時間の中で十分な練習時間を確保しながらテストを実施するためには，指導方法や評価方法のさらなる工夫が必要である。また，原稿の添削，発表順の作成，教室の確保など，教員の準備に多くの時間を要する場合もある。今後は，生徒が主体的に準備を進められる仕組みを整えながら，教員の負担軽減と実践の効率化を図る必要がある。

第二の課題は，学習者の多様性に対応した足がけである。これまでの実践では，主に英語に苦手意識をもつ生徒が安心して活動に取り組めることを重視してきた。一方で，学習の進度が速い生徒や英語を得意とする生徒が，さらに挑戦できる場面を設定する必要もある。今後は，生徒の実態に応じて難易度を選択できる課題や，発展的な表現に挑戦できる課題を設定するなど，個々の学習者に応じた足がけについて検討していきたい。

第２分科会

「新時代に対応した英語教育　～未来を切り拓く英語力の育成～」

Tips for “Ordinary” Teachers

発表者　青森県立八戸工業高等学校　島村　　泉
助言者　青森県教育庁学校教育課　　大居　高広
司会者　青森県立青森中央高等学校　品川　沙織
記録者　青森県立青森中央高等学校　金野　絢子

１　学校概要

青森県立八戸工業高等学校は、昭和１９年に創設された学校である。機械科・土木科・電気科・材料技術科・電子科・建築科の６学科を編成している。１学年の英語コミュニケーションⅠでは、「English CommunicationⅠ COMET（数研出版）」を使用している。英語を苦手とする生徒が多い。

２　リスニングの指導

「聞く力」と「理解する力」の２つが組み合わさって「リスニングの力」になる。生成文法によると、言語は、音声を受け取る、その音声を処理する、その音声から意味につなげるという信号のやりとりでできている。英文を黙読しているときも、音声を読んでいることになるので、「リスニングの力」を鍛えれば、「リーディングの力」も伸びる。私の直感として、「聞く力」と「理解する力」は別の力であり、学習の習熟度に関係なく「聞く力」は鍛えることができる。

「聞く力」を鍛えるために、授業中の音声は常に加速して再生している。アメリカのABCニュースと同程度のスピードになるように1.25倍から1.5倍で再生する。１回目は、聞き取ることが難しいが、２回目以降は音声のスピードに慣れてくる。リスニング英検（工業高等学校長協会主催）の問題も、対策のために加速して再生しているが、１～２回の再生で、ほぼ100%の生徒が正解することができるようになる。毎日加速した音声を聞いていると、なんとなく大事なところだけ聞こえるようになってくる。生徒は、一字一句聞き逃さないことから解放され、話の大意をとらえるようになる。そのため、スクリプトは配布していない。速い音声に慣れると、通常の音声はとてもゆっくり聞こえる。

オーバーラッピングは教科書の音声を1.1倍から1.25倍位加速して再生したものを用いている。音声のスピードに慣れることが目的なので、ゲーム感覚で、生徒は楽しく取り組んでいる。細かいところまで聞き取ってほしいときや、英文の内容をしっかり理解したいときなど、目的に合わせて速度を変えるのが良い。視覚よりも音声を重視したい。

３　板書の工夫

板書は、黒板に白チョークだけを使って、手書きで書いている。板書がカラフルでわかりやすければ記憶に残るというものではない。白チョークのみ使用すると、視覚情報により安易にわかったつもりになるのではなく、英語をきちんと理解することに集中することができる。以前、青森高校の探究学習で、ある生徒が「黒板とパワーポイントでは、授業内容がより記憶に残るのはどちらか」について調査した結果、授業で黒板を使った方が学習内容はより定着するという結果になった。教員が黒板に書くスピードと生徒が理解するスピードが合っているというのが理由の１つであった。現在パワーポイントを使っている人も、一度黒板に戻してみたらよいのではないか。

４　グループ学習を取り入れた授業

授業では、グループ学習を取り入れている。生徒が口頭で解答するときは、「せーの」と声をかけ、一斉に答えさせている。黒板に答えを書くときは、一人ずつ指名するのではなく、グループで答えを確認して、どこでもよいから自分が答えられる問題を解答することにしている。全ての問題の解答が書かれるまで待っている。グループ内で答えを協動的に導くことで理解が深まり、教員の説明が不要になる。説明を聞く力より、考える力を伸ばしてほしい。どんなにわかりやすい説明でも一度で理解できる人は多くない。自分たちで考えながら理解できるようになることが協動

的で深い学びなのではないかと思う。グループ活動に参加できていない生徒がいれば担任に伝え、次の指導につなげている。

生徒は指名されることに不満を持っている。指名され、注目される、茶化される、答えるまで待たれるのは苦痛である。吃音の生徒にとっては特に苦痛である。また、指名して答えさせることは、指名された生徒にしか焦点が当たらないので、評価の対象に含めることができないのではないかと思う。

５　パフォーマンステストの実践

パフォーマンステストを年に１、２回実施している。グループ内での発表としており、英語の発音や、文法に正しさを求めないことにしている。「主体的に取り組む態度」の観点から、まず英語で話すこと、相手に話の内容を伝えようとする姿勢を評価している。英語を話してみたいと思わせるように工夫している。また、教科書のルーブリックを用いて、生徒に総合評価をさせている。

パフォーマンステストの例として、１学期には、教科書の例文に倣って英文を作ってみる、そしてそれについてグループで会話をしてみる活動に取り組ませた。ルーブリックを元に、生徒同士で採点させながら取り組んだところ、全く発話のない生徒はいなかった。どうしても英語を話したくない生徒には手立てが必要である。英語で発表することに不安がある生徒もいるが、年に１，２回は取り組ませた方が、自然発生的な発話や自主的なスピーキング活動に繋がっていく。

６　百問繚乱の活用

百問繚乱を活用すれば、定期考査の採点を１日で終えることができる。オンラインで答案返却をすることができ、印刷紙とインクの節約になる。生徒の手書きの解答用紙は、添削せずに返却し、それを元に、グループで相談させながら模範解答を作成させている。自分たちで教材を調べながら模範解答を作成することで理解が深まる。

７　質疑応答

なし

８　助言　大居指導主事

英語を加速した音声で聞いていれば、それが当たり前になっていくということがポイントだと思う。加速した音声でインプットして、インテイクし、さらにアウトプットの活動も加速した音声をもとにしていくなら、かなり活発な活動ができる。インプットをどのようにアウトプットに持っていくか工夫し、各単元でどのようなアウトプット活動をするか計画していけば、学習効果のあるものになる。限られた授業時間内で、凝縮したリスニング活動ができるので、授業を構成する上でもメリットになる。年間で、加速してリスニングさせる単元と、ゆっくりリスニングさせる単元を計画立てるとよい。そうすれば、もっと面白く、活発にメリハリのついた授業になるのではないか。

板書の仕方は、黒板を使い、余計な情報を与えない、ということだった。生徒の実態を把握し、生徒に合った授業の方法を模索した結果、黒板への板書にたどり着いたのではないかと思う。ICT を活用するように発信しているが、ICT を使用する目的は、学びを深めることである。授業で ICT を使うこと自体が目的になっており、ICT を使うメリットがあまりない授業もあるのではないか、と考えさせられた。目の前の生徒にとって、何をどの程度示してあげるのがよいか、何を使って示すのがより良い理解に繋がって、教員にとってやりやすいのか、今一度考えてみる必要があるのではないかと思う。視覚情報の安易な理解を防いだり、大事な内容の取捨選択をさせることで思考力の向上に繋げたりすることについて、どのような工夫をされているか具体的に知りたい。

授業では、基本的にグループ学習をされているということだった。生徒が安心して授業に取り組める環境作りはますます必要になる。それが英語力の成長にも繋がっていく。生徒が発言しやすい環境作りは大事である。グループ学習のときに、話しやすいメンバーと組んでよい、などかなり配慮されていることがうかがえた。グループで相談する時間を設けて、生徒が主体的に考えて意見を出し、答えを協動的に導く時間を設けるというのが良かった。生徒がどのような意見を出し合っているのかは気になるところである。教科書の問題を解くとき、なぜこの解答になるのか考える中で、思考力・判断力・表現力に繋がっていくと思う。

文部科学省では、現在、新しい学習指導要領の作成に向けて、取りまとめを行っている。今後、コミュニケーション活動を、主に思考・判断・表現を育成する活動と、主に知識・技能を育成する活動とに再整理する予定である。先生方が行っているコミュニケーション活動がどちらにあてはまるのか考えて、一旦整理してみるのもよい。思考・判

断・表現を育成するのは、最初の練習試合のようなものである。知識・技能を育成するためには、繰り返し訓練するような活動が必要である。具体的に条件を設定し、うまくいかなければ条件を変えて練習していくと良いと思う。

生徒に模範解答を作成させる際に、なぜ不正解なのか、グループで考える時間を設ければ、理解がより深まると思う。

生徒の立場になれば、授業の見え方が変わってくる。そのことを理解して、教員が授業を見直していけば、より良い授業を行うことができるようになる。英語の得意、不得意にかかわらず、生徒はペアワークやグループワークには活発に一生懸命取り組む。静かに取り組んでいる授業でも、脳が活発に動いている場面がある。活発に発話をする活動でも、静かに取り組む活動でも、生徒が自分で考えて活動していることが大事だと思う。自分の授業を振り返って、変えるべき部分が出てくるのは当然である。生徒の実態に応じて、学校全体の授業の見直しを行ってほしい。今後の英語教育に求められる変化を意識しておくことが、先生方の授業のブラッシュアップに繋がる。AI なども活用し、より良い授業を目指してほしい。

部　会　の　動　き

令和８年

５月１８日（月）第１回役員会（於 青森県総合社会教育センター）

案件（１）　令和８年度外国語部会役員（案）について

（２）　令和７年度事業報告及び令和８年度事業計画（案）について

（３）　令和７年度決算報告及び令和８年度予算（案）について

（４）　令和８年度青森県高教研外国語部会研究大会（案）について

（５）　ローテーションの確認

（６）　令和８年度青森県高等学校英語暗唱・弁論大会（案）について

（７）　令和８年度以降の外国語部会事務局設置方針（案）

（８）　外国語部会規約の改正について

（９）　その他

８月１８日（火）青森県高教研外国語部会研究大会（於 リンクステーションホール青森［青森市］）

大会テーマ：「グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方」

開会式・基調講演・公開授業・分科会（計２分科会：第２分科会発表者は東北大会で発表）

９月　８日（火）青森県高等学校英語暗唱・弁論大会（於 青森県総合学校教育センター）

暗唱の部（１校１名まで）　２名参加

創作の部（１校２名まで）２６名参加　※上位２名が東北大会へ出場

１０月２９日（木）第７６回東北六県英語教育研究大会

（於 酒田市総合文化センター）

大会テーマ：「新時代に対応した英語教育～未来を切り拓く英語力の育成～」

開会式・基調講演・公開授業（小・中・高等学校）

分科会（中学校２分科会・高等学校５分科会）

１０月３０日（金）第７４回東北六県中学校英語暗唱・高等学校英語弁論大会

（於　酒田市総合文化センター）

中学校の部６名，高等学校の部１２名参加

東北各県から暗唱の部・中学校（１名）と創作の部・高等学校（２名）参加

高等学校の部から２名が第１９回全国高等学校英語スピーチコンテストへ出場

１１月２０日（金）第７６回全国英語教育研究大会（全英連静岡大会）第１日

（於　静岡コンベンションアーツ　グランシップ）

大会テーマ「夢を広げる英語教育～未来を拓くグローバル人材の Agency 育成～」

総会・基調講演・実演授業（小・中・高等学校）

１１月２１日（土）第７６回全国英語教育研究大会（全英連静岡大会）第２日

（於　静岡コンベンションアーツ　グランシップ）

分科会第１部（小・中・高等学校計１３分科会）

分科会第２部（小・中・高等学校計１３分科会）

令和９年

１月２８日（木）第２回役員会（於 青森県総合社会教育センター）

案件（１）　令和８年度事業報告について

（２）　令和９年度事業計画（案）について

（３）　令和８年度決算報告（中間）について

（４）　令和９年度予算（案）について

（５）　今後の研究大会ローテーションについて

（６）　令和９年度青森県高教研外国語部会研究大会（案）

（７）　その他

２月　７日（日）第１９回全国高等学校英語スピーチコンテスト

（於　国立オリンピック記念青少年総合センター）

研　究　テ　ー　マ

紀要(集)	年度	研　究　テ　ー　マ	会　場	会員数	大　会参加数	大会発表者数
30	60	○これからの英語教育を考える －生きた英語力を育てるにはどうしたらよいか－	八工大第二高校	431	471 中高含	7
31	61	○英語教育に求められているもの －Focus on the learner－	五所川原高校	418	256	3
32	62	○自ら学ぶ力を育てる英語教育を目指して	弘前南高校	421	296	3
33	63	○国際化時代における英語教育のあり方を求めて	三沢高校	420	289	5
34	(平)元	○国際化時代に対応する英語教育を求めて	青森高校	424	315	5
35	2	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	八戸西高校	428	262	6
36	3	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	板柳高校	408	272	7
37	4	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘前中央高校	408	400 中高含	11
38	5	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	三本木高校	395	249	12
39	6	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森南高校	408	279	11
40	7	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	八戸高校	426	274	9
41	8	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	鰺ヶ沢高校	430	231	7
42	9	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘前高校	435	260	12
43	10	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森文化会館	423	1464	18
44	11	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	田名部高校	417	179	7
45	12	○実践的コミュニケーション能力を養う 青森県の英語教育のあり方	八戸南高校	417	215	8
46	13	○国際化の中における青森県の英語教育のあり方	鶴田高校	410	166	8
47	14	○新学習指導要領に対応する英語教育のあり方	黒石高校	406	200	3
48	15	○新学習指導要領に対応した 青森県英語教育の課題解決をめざして	青森東高校	405	182	3
49	16	○コミュニケーション能力の育成ための課題解決を模索して －How Can We Solve In Improving Communicative Competence?－	八戸高校	367	269	3
50	17	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	三沢商業高校	367	126	3
51	18	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	木造高校	348	130	3
52	19	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	弘前文化センター	328	122	3
53	20	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	326	137	3
54	21	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	331	119	4
55	22	○「発信力」を育成するための4技能を統合した英語教育を目指して（第60回東北六県英語教育研究大会）	弘前文化センター	340	344 中高含	7
56	23	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	八戸工業大学	341	120	4
57	24	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	324	125	4
58	25	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	アピオあおもり	338	135	4
59	26	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	三沢市国際交流教育センター	337	120	5
60	27	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	きざん八戸	323	136	9
61	28	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育	リンクステーション青森	333	333 中高含	11
62	29	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	松の館（つがる市）	317	124	5
63	30	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	弘前文化センター	303	142	6
64	(令)元	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	三沢市公会堂	309	127	14
65	3	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	オンライン	292	70	5
66	4	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	県総合社会教育センター	285	109	7
67	5	○グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方	八戸市公会堂	263	249 小中高含	29
68	6	○グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方	三沢市公会堂	258	104	5
69	7	○グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方	デーリー東北ホール（八戸市）	244	100	4
70	8	○グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方	リンクステーションホール青森（青森市）	248	88	4